

エッセイ 古本屋の仕事場19

セドリとは？

橋口 侯之介（誠心堂書店）

最近はいンターネットオークションが盛んで、掘り出し物を見つけようと渡り歩くことを「セドリ」といい、それを行う人を「セドラー」というそうだ。元々は古書業界の用語で、「同業者の店頭から転売を目的として古書を抜き買いすること」（『日本国語大辞典』）と説明されている。実際、昭和四、五十年代まで店をもたずに各地の本屋を回って本を仕入れ、それを古書市場や専門店に持って行って利ざやを稼ぐフリーの業者が少なからずいた。これをセドリと叫んだ。また、同業の本屋を回って本を仕入れる行為そのものをセドリということもある。

これに「背取り」という字をあてて説明することがあるので、本の背中を見て回わるからだという俗説が生まれたが、これは当たらない。なぜなら、洋装本になる前の江戸時代からあった用語だからだ。また、明治の初めに活躍したセドリが知られているが、かれらも主な商品対象は和本である。本の背中は見えない。

江戸時代の文献でセドリのことが明快に書かれているのは文政年間の人情本『玉川日記』二編の序である。そこに作者の南僊笑こと為永春水

のことをこう表現している（本書目三―四番が該当品、序文は写真版参照）。

今の南僊笑 昔を問へば為永正助、扇一本の舌講師よりたゞき出し、本の糶取の擔商、西行法師にあらねども、不断背中に包袱を放たず、昼は足を挿木にして江戸中を欠廻り……

若い頃の春水は講釈師をしながら、本の糶取の担商をしていた。西行法師が包みを背に載せて旅をした故事のようによいでも背中に風呂敷包みを放さず、江戸中を駆け巡っていたというのである。

この姿は、明治初期を描いた次の一文と一致する。

この一団には仁義があつて下駄は履かず泥鱈草履ばきで風呂敷を背負ひ……店先へは腰を下さずかぐんで商ひをした。この糶取のことを俗に風呂敷と云つた（『日本出版文化史』、振仮名・橋口）。

セドリは明治の初めには仲買とも称し、明治十二年「古本仲買ノ者は迄数年御店方ノ御蔭ヲ以テ渡世仕居候所」と、三十二名で仲買同盟を結成した趣意書が残っている（現大屋書房所蔵）。

もともと本屋仲間の記録に、

従当地江戸表三下り商内被致候仁、彼地仲間外世利売衆え一切取引致間敷……（『大坂本屋仲間記録』裁配帳享保十五年）

というのがあって、大坂の「世利子」が江戸の仲間に登録されていない「世利売衆」と取引をしてはならない、という決まりがあった。この世利売衆というのは、フリーの仲買をしていた者たちである。出版をする書物屋と区別されて、ほとんどが店もたずに行商で稼いでいた。そ

の実態は事実上、セドリであろう。

このように江戸から明治にかけて、本屋を回って仕入れをしていくセドリはたしかに存在したのである。その目で江戸の風俗を見ていくと、彼らを描いたと思われる絵に出会う。

左の図は『江戸名所図会』にある鶴屋喜右衛門店だが、左に風呂敷包みの男が二人描かれている。出て行くこうとしてしているのは、ここで自分の商売用に本を仕入れた売子もしくは貸本屋であろう。従来はその解釈のまま留まっていたが、左側の中へ入っていく者に注目したい。これこそが店に本を持ち込むセドリと解釈できる。奥の帳場には番頭格の店の者が帳面を広げて迎えている。



下の次の絵も、店の右側から風呂敷を背負った者が入っていく様子が描かれており、同様に解釈で



きるだろう。本屋に出入りする者は幾種類かいるが、風呂敷を背負って入ってくるのはセドリのような者に限られる。

江戸の書商・和泉屋庄次郎は若い頃セドリをしてこつこつと金を貯めて元手をつくり、浅草に店を開いたといわれる。隠居して松沢老泉と名乗り日記『堂前隱宅記』を残しているが、そこに記された日常の仕事ぶりは江戸中の本屋を巡って精力的に本を集めることだった。

たとえば、文政元年九月二日は、まだ暗いうちに浅草の自宅を出て、馬喰町から日本橋へ出て三軒ほど本屋を回り、その足で芝に向かい、数軒から何冊か本を買って歩いた。途中、当時、書物奉行だった近藤重蔵宅にあがり、珍本を見せてもらっている。そこから帰りには、また日本橋界限の本屋を軒並み尋ね、結局一日で十数軒の本屋と露店をのぞいた。ひたすら必要とする本を探し歩いたのである。風呂敷包みも背負っていただろう。

隠居して店は息子にまかせており、自分は好きな本屋巡りに明け暮れた。身分はれっきとした書物問屋だが、この行為こそセドリであり、こういうことをする人を今ならセドラというのである。